

# 長谷川徳幸先生のこと

長谷川徳幸先生は、昭和24年より名古屋市の「東方（東向き）」の松風陶器などから注文を受けて絵付けをされ、既に20回、年に1回のお教室展を愛知県立芸術文化センター等で開かれてきています。最初の作品展が平成6年、そして、この度、（お教室展ではなく）個展を名古屋陶磁器会館で開催されることになりました。

この機に、長谷川徳幸先生をご紹介したく、私がなぜこれほど長く長谷川先生の元に通ったのか、先生の絵付けの魅力は何なのかを、お話ししてみたいと思います。



縁あって長谷川先生の絵付けを学ばせていただくようになって、もう5年近くになります。神奈川在住ゆえ3ヶ月に1回程度しか名古屋に行けないこともあったのですが、絹糸のように細々と続けさせていただいています。私はヨーロピアン形式の絵付けを1年半程度と、大倉陶園チャイナペインティングスクールで6年、また植物画を日本園芸協会のコースで受けています。そのような経歴のある人間が名古屋式の絵付けを改めて習う必要はない、とも言えましょう。実はそれ程好きな描き方でもありませんでした。

ですが、当時の私は少し絵付け関係で迷っており、たまたま三田村商店の前社長であられた故柴山哲朗様にご相談をしたところ、長谷川先生のお名前を教えてくださいました。お店にあった長谷川先生の作品を拝見し、生徒さんのお一人が先生に代わってお教室案内のホームページを作られていたのですが、それを拝見して、考えました。つまり、先生の作品と作品のお写真を拝見して、お会いする前に長谷川先生に教えていただこうと決めました。筆目が分かる程の近くから拝見するとよく分からない、けれども、少し離して拝見すると猫や薔薇が生き生きと語りかけてくる作品。これらを拝見して、今までと全く違う描き方を教えていただくと何か私の中で気づいていくものがあるかもしれないと、そのために教えていただこうと考えました。また、近代窯業史を研究していますから、名古屋の絵付け技法を体得して次の世代に繋げていく役割の一端を担えるかもしれないとも考えました。以前から小さめの花バケも使っていましたし、見よう見まねでオールドノリタケの図案を描いてみたりしていたので、すぐ描けるようにはなるだろうけれども、この先生のような柔らかい薔薇が描けるようになるといいなあと思ったことを覚えています。

ところが、いざ習い始めてみると、なかなか簡単にできるものではありませんでした。



長谷川先生が目の前で描いてくださるのを何度となく拝見し、挙句にはビデオまで撮らせていただいて学ばせていただいたのに、1年はひたすら首を傾げていたように思います。なぜにこんなにも描けないのか、全く分かりませんでした。

名古屋式の絵付けは、大倉陶園と同じ遅乾性溶剤であるバルサムを使って描きます。道具として違うのは名古屋式では花バケという太い

平筆を使い、同じ筆とテレピンを使って抜くことでしょうか。大倉陶園でもテレピンを使って抜きますが、長谷川先生ほど多用しません。私の持っている花バケ筆の最大のものは幅12mm長さ22mmの物ですが、長谷川先生はもう一つサイズの大きい筆をお使いになっています。大倉陶園は金ダミ筆という丸筆を平筆にして使いますが、こちらは幅が3mm長さが13mm位です。最初はこの筆の大きさが上手く描けない原因なのだと思っていました。

勿論私が先生に譲っていただいたり三田村商店さんから購入させていただいた筆は新しいものでしたから、最初は筆が馴染んでいませんでした。馴染まないと、例えば、新しい花バケは角がなかなか出せません。金ダミ筆を使い始める時は、あまりに長く出ている毛を切る程度のことはします。ごくわずかですが、ナイフを使うわけですが、しかし、長谷川先生は切ってはいけないと言われました。描いていくうちに自然に筆がこなれてくるからというのです。でも、ただ描いているのではとても間に合いませんから、教えていただいて、陶板の裏などに当てて動かして穂先の毛の余分な凹凸をなめしていくことをしました。こうして筆を整えることで、かなり描きやすくなりました。

でも、先生のように描けないのです。なぜか。気付けば、当たり前のことだったのですが、熟練の独立職人として長年お仕事をされてきた先生と同じスピードで筆を動かしても同じにはできないのです。

長谷川先生は躊躇なくご自身の筆を貸してくださいますし、絵の具も溶いてあるものを分けてくださいます。見本を描いた後に筆をそのまま渡してくださいます。でも、そんなことでこの「差」は埋められません。拝見して、理解して、ずっと遅い自分のスピードとやり方で似せていくしかない理解するのに時間がかかりました。そして、理解してもなかなか上手く行えませんでした。

長谷川先生とは、絵の具の品番やそれぞれの絵の具の癖や絵の具の混色など、様々なおしゃべりもします。絵の具の色に対する印象は私も先生と同じものを予め持っていて、そこは話が早かったと思います。とはいえ、先生のお使いになる色は私が従来使ってきたものと少し違っていて、使わせていただいて、いくつかの色は品番をお聞きして、三田村商店様から同じものを分けていただきました。

先生のお使いになる絵の具は、私が自分用に選んでいた色よりもやや不透明な気がします。マロン系はオールドローズというオレンジとマロンピンクの間のようなくすんだ色を好まれます。ただし、これは焼き上がりの色と全く同じ色ではない絵の具なので、使うには少しだけ慣れが必要です。金茶も私のものの方が透明感がずっとあります。先生は金茶と鉄系絵の具で興味深い絵付けをなさいます。そして、あらかじめほぼ全ての色において、パレットの上で混色をして、使用する色として用意されています。

長谷川先生はパレットナイフではなく、大きな細長い長方形の金属のヘラを使って絵の具を練られます。グッと力を入れて絵の具を返してガラスのパレットに押し付ける、どのチャイナペインターも手馴れた作業を先生がなさる時に耳の奥に感じる微かな音。それはとても心地の良いものです。覚王山のお教室や先生のご自宅にお邪魔すると絵の具は既に先生のテーブルの上に多量に練ってあって、おそらくそれは普段お仕事でお使いになるままのものなのでしょうけれども、教室で

はそれを生徒にどんどん分けてくださいます（私は帰宅してからも同じ色が出せるよう、自分の絵の具を練って使うことが多いですが）。

長谷川先生は過去に名古屋陶磁器会館でインタビューを受けています。

[http://nagoya-toujikikaikan.org/gyokai/gyokai\\_9.html](http://nagoya-toujikikaikan.org/gyokai/gyokai_9.html)

この中で、夜間高校を卒業する前後には、企業で画工として働くのではなく、独立してメーカーから直接仕事を受け、自宅で描くことをされてきたことを話されています。名古屋の陶業界は、歴史的に「西向き（ノリタケなど、アメリカやドイツなどに輸出した、製造から輸出まで一手に手がけた大企業）」と「東向き（蘭領東インドなど東南アジアに多く輸出した、素地製造、加工（絵付けなど）、輸出等分業して行っていた中小企業）」の2種類がありましたが、その「東向き（あるいは東方）」の中の絵付け職人として働き、時に西向きの企業からの仕事もされていたわけです。人が白素地を届けにきて、絵付けし、また人が預かって帰るわけですから、絵付けは1回焼成を基本とするわけです。どんな図案でもどんな生地にでも描かれたそうですが、「単価から計算して、これは一日に20、これは30と、その割り出し」をして描きますから、大変速い絵付けができることも必要な技術でした。

このような中で、先生は「筆に乗せる絵の具をいかに少なくして、効果的に絵を描くかという訓練をします」とも話されています。「余分な筆を使って綺麗になることはありません」というお言葉は、実に耳が痛いと感じます。

ところで、名古屋の陶業史において、欠くことのできない人物がいます。「薔薇の市ノ木」と呼ばれ、「幾多の日陶見本課の絵師の中で、初めて（個人名による）サインを付すことを許された人物」「陶画の仕事では写実的で緻密な描写に徹する」と評される市ノ木慶治氏です。

市ノ木慶治氏は、明治24年生まれ、明治38年14歳で森村組絵付工場（錦陶組：大正元年に画工部見本工場に改称）に徒弟として入社し、17才で職工（画工）となり、昭和44年78歳で亡くなるまで見本絵付けなどを描き続けています。また、油彩画家でもあり、帝展に入選したり、日本陶器（元森村組、のちのノリタケ）の教育機関「技芸科」で西洋画を教えています。

長谷川先生は、ご自分はこの市ノ木先生に私淑していると話されます。市ノ木先生はずっとノリタケの画工として企業に勤務されていましたが、定年後木村商店や松風陶器で見本絵付けを描かれていた頃、長谷川先生はまだ20歳過ぎの青年でした。そのためか、直接市ノ木先生が描かれているのをご覧になる機会はなかったそうです。しかし、長谷川先生も仕事を受けた松風陶器や遠藤陶器で、市ノ木先生の作品を目にする機会は少なくなかったようです。絵付けをしている人は絵付け作品を見ればどう描かれているのか、見ただけで手順も筆運びも想像できると思います。ですから、直接教えを請うていなくても、きっと市ノ木先生の作品を拝見することで長谷川先生は多くを学び取られたのでしょう。市ノ木先生の絵の具の使い方や平筆の使い方に「惚れる」と長谷川先生は言われています。また、直接教えていただく機会はなかったものの、市ノ木先生の甥御さんとは友人であったので、どの絵の具をどのように使われたのか等、その方からお聞きすることはあったそうです。

平成27年（2015年）11月14日～15日、名古屋陶磁器会館で「市ノ木慶治作品展」が開かれ、市ノ木研究会メンバーによる講演会「ノリタケの絵付師市ノ木慶治の足跡を辿って」が開かれました。並べられた50点近い市ノ木の作品を前に行われた講演会の質疑応答の時間に、請われて長谷川先生は挨拶をされています。

この時私も行って市ノ木先生の作品を一度に沢山拝見したのですが、確かに素晴らしい絵付けでした。一気にぐいぐいと描かれているのに、題材が鮮やかであったり、艶やかであったり、風景画も多くありましたが、所々強い色がアクセントとして加えられているのに全体的に調和しており、架空の風景が多いのでしょうかけれども、ここに行ってみたいと思わせるようなものでした。

長谷川先生の風景画も薔薇の絵付けも、好んでお描きになる馬の絵付けも、同じように鮮やか・艶やかです。花びらの持つ柔らかさや馬の生命感が伝わってくるように感じられます。この薔薇の柔らかさの表現は、大変興味深く、何度も描いて見せていただきましたが、従来の私の描き方と手順が逆であるのも大変面白い点です。ともかく描かれるのが速いのですが、ほんのすこしの筆の傾きで生まれるわずかな曲面がどんどん描き進められていく間に生きてくるのです。一回焼成で描くではありませんが、必要なところは上に重ね描きもされます。それと同時に、やはり絵の具の筆への含ませ方が興味深いです。中に入れる色も筆の表面の色も混色しながら「ひょひょ〜い」と筆に含ませてしまわれるし、それを小鳥が飛んだり跳ねたりするような軽さで素地面に描かれていきます。ビデオで撮ってもスローにしないとなかなか分かりません。

お教室でご一緒するYさんは、「長谷川先生のお人柄が薔薇に出ている」と評しておられました。確かに市ノ木先生と描くスタイルは同じなのでしょう。でも、違う。個性が絵付けには出るものですね。

もう一つ。「長谷川先生はよく”僕なんか”と言われるけれども、”僕だから”になってほしいと思う」と、Yさんは言うておられました。“僕なんか”と言われる謙虚な先生も素敵なのですが。ただ、陶業がなかなか振るわなくなってきたままの現在、先生がお持ちの貴重な技術や感性を、次の世代、次々世代が受け継いで行ってほしいと思います。絵付けをする人は、見るだけでも多くのことを学ぶことができます。長谷川先生のことを多くの方に知っていただきたいと思うと同時に、先生の技を多くの方に実物を見ることで受け取っていただきたいと思います。

ご高読、ありがとうございました。

2017年8月28日

長野千裕

参考文献：

- ・「業界人のお話：第9回 長谷川徳幸さん」平成17年11月29日 名古屋陶磁器会館ホームページ掲載
- ・宮田昌俊「近代洋画と陶画（素書画付）の狭間で」『セラミックス・ジャパン Ceramics Japan 陶磁器でたどる日本のモダン 2016-2017』、岐阜県現代陶芸美術館、2016